



廣 瀬 川

第84号

平成26年
1月31日

仙台市小学校長会

発行者／堀越 清治（会長） 責任者／榊井 裕（広報部長）

主張

復興の「初心不可忘」

副会長 熊谷 和彦（木町通小学校）



「初心不可忘（初心忘るべからず）」は、「花鏡」のなかにある言葉だが、世阿弥はの中でこれを次のように記した。

「初心忘るべからず。此句、三ヶ条の口伝在り。是非の初心忘るべからず。時々の初心忘るべからず。老後の初心忘るべからず。此三、能々口伝為すべし。」

「初心不可忘」には、「よい点も悪い点も、若い頃の未熟さを忘れてはいけない。」「その時々における初心を忘れてはいけない。」「老後の初心を忘れてはいけない」の三つの意味があったのである。「石の上にも三年」ではないが、震災から3年が過ぎようとしている今、この三つの意味に照らし東日本大地震からの復興に向け取り組んできた仙台市小学校長会の歩みや校長としての自らを改めて考えてみたい。

一つ目の「初心不可忘」では、地震直後、誰にも相談できない中で校長として下した決断や指示がどうであったかを覚えておくことである。そうすることにより、その後の自らの判断基準の上達ぶりを相対的に知ることができ、仮にその時の判断に小さなミスがあったにしても同じ間違いをしなくて済むからである。

二つ目の「初心不可忘」は、1年、2年と復興への取組を進めていく過程において持っていたその時々におけるそれぞれの「初心」である。それは具体的

には、「東日本大震災記録集」や「教育復興実践事例集」に示してある、校長がリーダーシップを発揮しながら学校・地域が一丸となって展開した復旧に向けた教育活動をどう伝えつないでいくかということにほかならない。

三つ目の「初心不可忘」は、震災後3年となる今年度、「夢と希望をもち、たくましく生きる子どもを育む学校経営の推進」をテーマに11月7～8日に開催された指定都市小学校長会研究協議会仙台大会の意義と成果である。大会では、全国から集った校長たちが「震災・防災・復興」の視点から研究協議を深め「防災教育」「自助・共助の有り様」についての考えを共有するとともに、その成果を全国に発信することができた。また、そこでは、震災の日から仙台大会での発信に至るまでの3年間には、その折々で私たちが校長として、あるいは、仙台市小学校長会という組織で復興に向けた様々な取組をしてきたことの確かさが謳われた。しかし、現状を鑑みると、これでよいと言えるような到達点は、まだない。

大切なのは、校長がこれまでの成果をどう具現化し、自校の状況に応じた確かな実践に結び付けていくかということである。新たな「初心」の始まりである。私たち校長一人一人が、そして仙台市小学校長会が、常に「復興の初心」に立ち返りながら、今後の展望を確かなものにしていきたいと願う。

内 容

○主 張	1
○特集・復興「復興への新たな取組」	2
○研修部から	6

○生徒指導部から	10
○提言「復興に向けた創造ある教育」	11
○新任校長所感	13
○編集後記	20

特集・復興

復興への新たな取組

まちづくりへの関わりと地域連携の新たな取組について

片平丁小学校 佐藤 洋

1 はじめに

本校は、PTAはもとより町内会や地域の様々な関係団体等と良好で親密な関係を築き、豊かな教育活動を推進してきた。本校が地域活動の核になっており、互いにとって連携は極めて重要である。

2 「片平地区まちづくり会」との関わり

平成22年、「片平地区まちづくり会」が設立された。その目的は、地域間・組織間の垣根を超えた片平地区全体でまちづくりに取り組み、より良い暮らしや活気ある地域を実現していくことである。片平地区の連合町内会が中心となり、体育振興会、社会福祉協議会、民生委員児童委員協議会等で組織され、学校やPTAも会員となっている。

地域が主体となって片平地区の願うまちづくりを実現するよう、計画の策定に向けた話し合いが行われた。「安全・安心の確保」、「コミュニティ活性化」、「歴史・環境保全」の3分科会での検討に本校も加わった。平成25年3月には、計画が冊子として発行された。計画の中には様々な実践プロジェクトが設定され、本校と連携した取組が推進されている。

3 本校との連携の概要

(1) 安全・安心の確保について

「片平地区まちづくり計画」の中に、「地域防災体制の強化プロジェクト」「共助体制構築プロジェクト」があり、具体的な目標と実行計画が示されている。東日本大震災の教訓を生かし、地域としての課題に対応した取組計画となっている。

本年度、仙台市役所担当課にご指導いただきながら、「片平地区避難所運営マニュアル」作成を進めている。作成のための避難所運営準備委員会も、本校職員を含めた「片平地区まちづくり会」の委員代表で組織されている。まちづくり計画との関係を図りながら、地域の実情に応じたマニュアル作成を目指している。なお、本年6月に本校を会場に行われた「仙台市青葉区総合防災訓練」にも、まちづくり会と連携して取り組んだ。

(2) コミュニティの活性化について

世代を超えた交流を目標とする「かたひら四季

イベントプロジェクト」が四つある。5月の学区民運動会と8月の夏祭りは、本校を会場とし、全面的に連携して行っている。今年の夏祭りでは、6年生が遊びの店を担当した。児童はとてもよく活動し、目標達成に大きく貢献した。10月は、片平地区の様々な団体が連携協力し、市民センターを会場としてお祭り「WAIWAI広場」を行う。本校児童の演技やブラスバンド演奏、五橋中学校の合唱、県立工業高等学校の吹奏楽演奏等もある。

(3) 歴史・環境の保全・活用について

広瀬川と歴史を活用した観光・文化交流のまちづくりを目標として、実践プロジェクトが設定されている。

その中の一つ「片平まちなかテラス」整備プロジェクトは、地域が運営に携わり多世代が交流する地域の広場を整備している。本校は、広場の中にある「まちなか農園」で花苗を育てている。

また、「片平観光ストリート創出プロジェクト」の一つ「ホテル復活に向けた取組」に、今年度から連携して当ることになった。5年生が幼虫の放流活動と水路清掃を地域の方と共にを行い、ホテルがすすめる環境づくりについて学んだ。環境維持に向けた児童の意識を高める教育活動を進めることは、ホテルが舞う地域を維持することにつながっていくと考えている。

4 おわりに

片平地区まちづくり会は、地域の歴史から暮らしの情報に至るまで幅広く、そして、分かりやすく片平を紹介する冊子『ウエルカム片平』を作成した。地区内に建設される「復興公営住宅」入居者の方や新たに片平地区に居住する方と共に「連携が図られてよい関係を築き、楽しく暮らせるまちづくりを実現したい」という思いからである。

学校としても、児童に温かく迎える心を育てたいと考えた。そこで、教室に『ウエルカム片平』の冊子を常備していつでも学べるよう、全児童数分ご寄贈いただいた。学校が地域と思いとを共有して連携することが、何よりも大切だと考えている。

特集・復興

復興への新たな取組

チャレンジする行動力の育成

台原小学校 伊東 智恵子

1 はじめに

震災から2年8か月。若者によるボランティア活動は今も新しい企画を次々に生み出している。声を出し合い、連絡を取り合って着実に歩みを重ねている。なんて優しく、たくましい行動力なのだろうか。目の前にいる小学生も10年後には、彼らと同じ年代となる。人のために何かしようとする若者、人から感謝され、頼りにされる若者になれるのだろうか。いや、私たちが育てなければならない。それがたくさんの方の救いの手を差し伸べてくれた人々への感謝、被災地で育つ若者を見守る私たちの使命だと感じている。

この思いは、仙台市教育振興基本計画の「今後必要な力、育みたい力」とも重なる。そこで台原小学校では全ての児童の自発的行動力が高まるように、児童会活動を充実させることとした。チャレンジする楽しさやその意義を児童・保護者・教職員が共有できるように工夫している。主な活動を紹介したい。

2 自己表現で輝く子ども

個人の持つ能力を表現することで、自己開放の喜びや成就感を味わわせるとともに、他の意見や活動を認め合う心を伸ばす。

(1) 運動会や丘の子発表会の全校スローガン募集

児童個人への公募。運営委員会で候補作品を絞り、全校投票にて決定。その後委員会が垂れ幕やポスター・賞状を作り、朝会でスローガンの考案者を表彰。投票時は考案者がどんな思いで書いたのかを想像し、自分のめあてと一致するものを真剣に選んでいた。次年度への出品意欲につながっている。

(2) 委員会から全校児童への企画呼びかけ

掲示委員会のイラストコンクール、飼育栽培委員会の学校花壇植栽図案コンテストなど、児童の発想による取組を休み時間を使い企画・運営させる。誰かが声を出せば、形として実現可能な行事になることを体感させることができた。

(3) 学級博士紹介

学級自慢の秘技を持つ児童を発掘し、昼の放送で紹介。朗読名人、車博士など、多岐にわたる才能の持ち主が立候補、学級の応援団が解説や進行

をするなど、創意工夫された演出が見られた。座布団回しとヨーヨーを発表した児童は市民センター祭りの学校代表として出演し、地域の方々から好評を得た。地域交流として子どもが学校外へ飛び出すという、開かれた学校づくりの広がりを感じた。

(4) 丘の子グランプリ

児童会主催の演芸大会。児童は全校児童の前で披露したい出し物をエンタリーする。個人でもグループでも構わない。企画・運営は児童会。出場者は、紅白に分かれてピアノ、お笑い、ダンス等を披露。自分とは異なる趣味を持ち努力している友達の姿を見て、認め合う心やそれを応援していこうとする企画力を育てるのに、大変効果的であった。



3 人のために、心を震わせ動き出す子ども

各種学びの中で、突き動かされるような感情を味わわせ行動力の根幹を確立させる。他と関わる中で、支え合い頼られる存在となることを実感させる。



(1) エコキャップアート

美しい町を再生するためには環境を守りながら心をつなぐ必要があるという発想の下、ペットボトルのキャップを集め、絆をテーマにした壁画を完成させた。

(2) ハッピーあいさつキャンペーン

あいさつができた日は児童がシールを貼って模造紙4枚分のハッピーという文字を完成させた。代表委員会で決めたネーミングにも心が温まる。他学年間のあいさつが活発になった。

4 今後の復興プロジェクトに向けて

復興とは、手を差し伸べられるのを待っていることではない。ありがとうと繰り返すのでもない。内なる活力が動き出してこそ始まる。小さな考えが友達の輪を広げ、形となって日本中へ広がることを知ってほしい。若者が持つ元気やアイデアが世界を変えることを体験してほしい。子どもたちの心にともった炎を、強くたくましい明かりとして育てていきたい。若者に求められている次世代を担う力は、小さな成功体験から生まれるものだと確信している。

特集・復興

復興への新たな取組

笑顔輝け！スマイル田子

田子小学校 安倍 啓司

1 はじめに

震災以降、厳しい生活環境の中で子育てまで目が行き届かない家庭や、学校に関心を向けるだけの余裕がない家庭が増えたように感じられた。子どもたちの中にも落ち着かない様子が見られるようになった。家庭であまり褒めてもらえない子や、自信がなく人前でちゃんと話せない子、声に出してあいさつできない子等、自尊感情の低さも気になった。子どもたちにもっと声をかけてあげてほしい、もっと認め褒めてほしい、そんな思いを強く持った。そこで、保護者の方々に、学校や子育てに対する関心を高めていただくには、学校の取組や子どもたちの活動の様子をしっかりと目に見える形で発信することが大切だと考えた。

2 協働型学校評価の改善活動

本校の重点目標は「気持ちのよいあいさつをしよう」である。平成24年9月、PTAにお願いして「笑顔輝け！スマイル田子」というのぼり旗を36本製作してもらった。教職員には、職員会議で、「教師にとってあいさつは基本的な指導技術である。本気になって『プロのあいさつ＝笑顔と元気な声』を見せよう。」と話し、第2学期初日から3日間、教職員とPTA役員によるあいさつ運動を実施することにした。

第2学期が始まると、通学路にのぼり旗がはため



き教職員の元気な声が響いた。教職員のはつらつとした姿は子どもを元気にすると改めて実感した。登校して

くる子どもたちの表情が大きく変わり、元気よく声を出してあいさつする子どもが増えた。学校が活気付いている印象を受けた。それは防犯ボランティアの方々も驚くほどで、次々にうれしい感想を聞かせてくださるようになった。その後、6年生が自発的に運動を引き継ぎ、毎朝、のぼり旗を持って校門前に立つようになった。子どもたちの活動と元気な声は、

学校が何かを始めようとしているという印象とともに保護者の間でも話題になるようになった。

3 小中高・地域連携による「あいさつ運動」

田子地区には、高砂小・田子小・田子中・宮城野高による4校連絡会という組織があり、それぞれ連携して様々な交流活動を行ってきた伝統がある。

平成25年度、中学校区青少年健全育成連絡協議会が主体となり、5月10日の故郷復興プロジェクトに合わせて、「田子地区を明るくするあいさつ運動」を実施した。本校は、学校に関心を向けてもらう絶好の機会と考え、学区内10か所で実施することにした。



本校の校門前には、小中高の児童生徒と保護者、町内会、民生委員児童委員協議会や防犯ボランティアの方々が立ち、「おはようございます。」と呼びかけた。6年生は高校生と一緒に中学校の前に立った。引き続いて行ったセレモニーでは、中学生、高校生から小学生に対して「共に頑張って地域を明るく元気にしていこう。」とのメッセージを発表してもらった。中高生の話は、「地域」としての一体感を感じさせた。多くの人たちから注目されることが、大きな励みになり、自分たちの活動に誇りを感じられるようになったと思っている。元気なあいさつは田子小の自慢の一つになった。(2回目を11月1日に実施)

4 終わりに

こうした地域連携の輪は、さらに、幼稚園・保育所・市民センター・児童館も参加する拡大学校保健委員会や協働型学校評価シンポジウムの開催へと広がっている。この連携を土台に、学校支援地域本部「田子っ子応援団」の組織化を進めたいと考えている。

特集・復興

復興への新たな取組

本校の使命と受け止めて

七郷小学校 山崎 茂

平成23年度から、校内研究として「震災復興学習」に取り組んだ。復興学習という言葉は、学校教育の活動には見当たらないかもしれないが、児童の実態を踏まえて、まずは目の前の子どもたちを元気にさせること、そして、将来を見据えて、震災復興の担い手となる子どもたちを育てることが学校の果たす役割ととらえ、研究をスタートさせた。

震災復興学習で最終的に身に付けさせたい力は、将来を見据えた「たくましく生きる力」である。その具体的な構成要素を「ものの見方・考え方」、「人間関係形成力」、「心と態度」とし、これらを身に付けさせるために、各教科、道徳、外国語活動、総合的な学習の時間、特別活動において、どんな活動が震災復興学習となるかを洗い出し、実践を進めた。

主な学習活動としては、学区内の仮設住宅訪問、商店や施設の訪問、「いぐね」を活用した学習、畑を借りての栽培活動、七郷のいいところ発見、グリーンカーテンなどの環境学習、みそ作り、絵馬作り、未来の七郷まちづくりなど故郷・七郷を中心に学習活動を実践した。特に、3年生は、「いぐね」で採集した松ぼっくりなどを使ってオブジェを作り、支援への感謝のメッセージを添えて市内のホテルに展示してもらった。5年生は、東北工業大学の先生や学生の協力で復興絵馬作りを行った。6年生は、山形大学の先生や学生の協力で、未来の七郷のジオラマ作りに取り組んだ。グリーンカーテンや緑のトンネル作りでは、豊富な知識を持った人たちがボランティアで指導してくれた。

子どもたちは、様々な人たちと出会い、いろいろなことを教えてもらった。改めて七郷という故郷を見つめ直し、新たな思いを持つことができた。

24年度は、七郷中学校区として、七郷中学校、荒浜小学校と共に新たな防災教育モデル校に指定された。行政区から1地域ということで、若林区では津波想定地域として七郷中学校区が指定された。実際に津波被害に遭った荒浜小学校、長い期間避難所になった七郷小・中学校において、いかなる防災教育をしていけばよいのか模索していった。

主な取組として、まずはそれぞれの学校で、避難

訓練、集団登下校訓練、引渡し訓練、地震対応マニュアルなどの見直しを行った。荒浜小学校、七郷小学校では防災教育の研究授業を実践した。七郷中学校では、子どもたちが学区の防災マップ、フォトブックを作成した。合同の活動として、教職員、児童生徒対象の研修会、防災手帳の作成、そして、成果発表として、3校合同復興展を行った。アエルのニコンプラザを借りて、1年間の取組を展示し、保護者など一般の人にも公開した。

25年度は、仙台市教育委員会の勧めもあり、文部科学省から研究開発学校の指定を受けることになった。突然の話で、十分検討する時間がない状況だったが、職員には、「これは、被災校に近く、長く避難所を運営していた七郷小学校の使命と受け止めた」と説明し、理解してもらった。

研究の概要は、次のとおりである。

「震災の教訓や体験を風化させず、今後の教育活動の中で継承していくためには、児童の直接体験に拠らない、より汎用性や継続可能性のある防災教育の具体的な指導法を確立していく必要がある。そのために、まず、学校教育活動全般を防災の観点から広く見直し、関連付けて、新たな視点で再構築するとともに、教科・領域の内容の一部を統合した『防災安全科（仮称）』を全学年に創設する。」

指定期間は、今年度から4年間である。1年目の今年度は準備期間として、すでにカリキュラム作りを進めている。児童の実態を踏まえて、育てたい資質・能力を設定し、各学年の教科・領域の中から、防災教育に直接的・間接的・周辺的に関連する内容の洗い出しを行った。それを基に、設定できそうな単元を検討し、さらに、年間指導計画としてまとめる作業へと進めていく。同時に、児童、保護者、地域関係者を対象とした意識・行動調査をするため、アンケートの内容等を検討しているところである。

昨年度まで校内研究として取り組んできた「震災復興学習」の内容を継続しながら、『防災安全科』の創設に向けた、研究開発学校としての取組を進めていきたいと考えている。

研修部から

第67回指定都市小学校長会研究協議会

仙 台 大 会 報 告

研修部長 飯塚 巖 (桂小学校)

1 はじめに

第67回指定都市小学校長会研究協議会仙台大会は、全国から270人を超える会員を迎え、盛大に開催された。大会主題「夢と希望をもち、たくましく生きる子どもをはぐくむ学校経営の推進」をテーマに、1日目の研究協議会及び話題別情報交換会、2日目のシンポジウムにおいて、各都市の取組が発信され、相互に情報を交換・共有し合い、さらに課題解決に向けて具体的な取組を明らかにする大会となった。

【第1日目】

2 開会式

(1) 開式のことは 実行委員長 渡部 力

仙台市小学校長会は、全国から寄せられた支援に、感謝の気持ちを込め、教育の力による復興への取組をお伝えし、おもてなしの心を添えて仙台大会を開催する。

(2) 国歌斉唱

(3) 大会会長挨拶 会長 堀越 清治

第67回研究協議会が被災地仙台で開催されることになった。今、学校には、震災体験を踏まえた教育の不易と流行を見定め、子どもたちに夢と希望をもって未来をたくましく生きる力を育むことが求められている。震災が投げ掛ける小学校教育への課題に対して「震災・防災・減災」の視点から研究協議を深める。仙台市小学校長会一同、充実した協議会となるよう準備を重ねてきた。活発な研究討議がなされることを願います。



(4) 来賓祝辞

仙台市長	奥山恵美子様
仙台市教育局次長	熊谷 祐彦様
全国連合小学校長会長	堀竹 充様

(5) 来賓紹介・祝電披露

(6) 大会趣旨説明 研究部長 飯塚 巖

(7) 閉式のことは 副会長 熊谷 和彦

3 研究協議会

【第1回研究協議会】

○第1分散会 「学校経営上の諸問題」

堺市立茶山台小学校長 西尾 宜精

新潟市立大野小学校長 南 敦

○第2分散会 「教育課程編成上の諸問題」

川崎市立殿町小学校長 榊山 英昭

北九州市立西小倉小学校長 中村 章

○第3分散会 「人権教育推進上の諸問題」

町田市立本町田東小学校長 宮崎倉太郎

静岡市立井川小学校長 川島 広己

岡山市立桃丘小学校長 岡 浩一

【第2回研究協議会】

○第4分散会 「特別支援教育上の諸問題」

大阪市立中央小学校長 札幌 俊二

仙台市立高森小学校長 安田まき子

相模原市立若草小学校長 大里 朝彦

○第5分散会 「児童生徒指導上の諸問題」

福岡市立城浜小学校長 古賀 理恵

浜松市立西小学校長 江間 敏郎

○第6分散会 「学校・家庭・地域連携上の諸問題」

京都市立醍醐小学校長 林 明宏

千葉市立幕張南小学校長 椎名 明彦

4 話題別情報交換会

(1) 「校長会の組織運営」

(2) 「心の教育の充実」

(3) 「教職員の資質向上システム」

(4) 「地域と進める防災対策」

(5) 「学力向上に向けた取組」

(6) 「教育課程としての防災教育」

【第2日目】

5 全体研究協議会「シンポジウム」

研究協議題

「今、学校教育に求められていること

～東日本大震災が投げ掛ける課題を通して～」

(1) 自己紹介

○コーディネーター

仙台市立茂庭台小学校長 猪股 亮文

シンポジウムでは二つの課題を提起し、皆さんと共有し、追究していきたい。

○コメンテーター

千葉大学教育学部教授 天笠 茂先生

震災後、私は、日本教育経営学会の一員として、千葉や宮城に行き、校長先生方にインタビューや調査などを行った。大変印象的で深く心に残っている。

○シンポジスト

神戸市立霞ヶ丘小学校長 村岡 弘朗

阪神淡路大震災の大きな被害は、直下型のため家屋の倒壊と火災だった。一番の反省点は、多くの人が神戸には地震が来ないと思っていた油断である。地震が発生したときは、子どもたちは保護者の下にいて、教員が児童を避難誘導する必要がなく、津波被害もなかった。当時いた御蔵小学校がある地域一帯は火災となった。学校の避難所には69名の児童が避難しており、当たり前のように避難所対応が求められ、1年3か月を学校再開と児童の心のケア、避難所対応で過ごした。

○シンポジスト

新潟市立上所小学校長 森 正司

昭和39年6月16日午後1時2分、新潟地震が発生した。震度5強の地震だった。当時小学校5年生の私は、港の近くにある高台の学校にいたが、津波を警戒し全校で避難した。大津波の危険が収まり学校に戻るようになったが、信濃川と海にある堤防が壊れ、津波の水で町は水浸しになっていた。学校が再開したのは、ずいぶん後になってからである。

○シンポジスト

静岡市立横内小学校長 山本 富裕

東海地震が発生すると言われながら、まだ発生していない。校長会の現状把握としては、静岡市を沿岸部「津波」、市街地「火災」「液状化」、山間地「山崩れ、土砂災害」「水」のおおよそ3地域3災害に分け防災対策の基本としている。学校の置かれた実情を考慮した防災対策、防災教育を行っていく必要がある。

(2) 話題提起

○「仙台市における東日本大震災の概況」

仙台市立桂小学校長 飯塚 巖

○「発災後、校長として何を考え、どう行動したか」

仙台市立荒浜小学校長 川村 孝男

1年生は1時間前に下校し、2・3年生は下校のために校庭に集合し、4・5・6年生は通常の学習をしていたとき、地震が起きた。停電になり情報収集の方法が閉ざされた。津波対応として屋上に逃げる訓練をしていたが、寒さを考え4階の

教室に避難した。住民とは津波・地震対応の避難訓練を合同で行っており、3階以上の教室に町内会ごとに避難することになっていた。最終的には233名の方が校舎内に避難してきた。海岸に津波の第一波が到達し防波堤を越え、その後学校も津波にのみ込まれた。翌朝、町並みは無くなっていた。

各町内会長に避難所運営委員会の設立を要請し、学校と住民の役割分担ができた。担任以外の職員は地域の方と一緒に物資の配給に当たった。児童は17時30分からヘリコプターで一人一人救出された。



職員を一人ずつ乗せ、避難先に着いたら児童を把握するよう指示した。教職員と児童、住民は、避難先の自衛隊の体育館から20程度の避難所に分散した。教職員は、徒歩や自転車ですべて避難所を回り、児童の安否確認や励ましを行った。

○「調査Ⅱの結果と今後生かすべき課題」

仙台市立富沢小学校長 郡山 孝幸

(3) 課題1に関する意見交換

○猪股 【課題1】子どもたちの「生きる力」を培う防災教育へと深化を図るために校長がなすべきことは何か、キーワードを示しご説明願いたい。

○村岡 【カリキュラムと教材】

まずは教育課程の中に位置付けていかなければならない。そのためにはねらいがあってどんな内容を防災教育に取り上げるか、どんな教科等に位置付けるかが重要になる。もう一つは、指導する教材である。神戸の場合は一つは副読本、もう一つは、震災体験等を地域の方々に語っていただく活動などである。神戸では、「生きる力を育む防災教育」と名付けて、めざす子ども像を六つ挙げている。

さらには、防災教育を構築するために三つの視点を神戸では大事にしている。

○森 【自助の防災教育から共助の防災教育へ】

新潟市では、地域防災計画に基づき、新潟地震時の地域被災状況を踏まえた学校安全計画の下、防災教育を行っている。県全体でも防災教育への取組が進んでいる。また、平成26年の新潟地震50周年に向けて、震災発生時刻に公共機関や地域コミュニティも参加し、新潟市の市立学校の全校で地震と津波を想定した避難訓練が実施される。これに合わせた防災教育プログラムはそれぞれの機

関や立場で企画されている。

○山本 【系統的、連携から自助・共助】

防災教育を中心とした学校安全計画を作成している。この中で防災教育で身に付けさせたい力として、「知識・思考・判断」、「危険予測と行動」、「社会への貢献」の三つを取り上げ学年の目標、年間計画の作成を行っている。この中に自助・共助を含めた系統的な指導内容を入れるということで、DIGやHUGの訓練を取り入れている。

○川村 【未来への希望】

子どもたちには、未来は明るいという気持ちを持ってもらいたい。長い避難生活のため将来に不安を抱く児童がたくさんいる。子どもたちには、「自分づくり教育」を通して、将来への希望をぜひ持たせたいと思う。また、新たな防災教育を通して、安心して生活していける力を付けさせたい。

○天笠 【校長の仕事はカリキュラムの編成】

防災教育とカリキュラムをどのように理解し、編成するのかということになる。

一つ目は自助・共助・公助である。神戸市は、災害教育を資質能力ベースで捉えている。資質能力ベースで防災教育のカリキュラムを開発するという言い方をすると、次の学習指導要領のめざす方向と軌を一にすることになる。次の学習指導要領を展望したときに、資質能力がキーワードになる。要はどんな力を育てたいのかであるが、それを今日の提案からすると、静岡の提案が一番整理されている。「知識・思考・判断」、「予測」、「貢献」といった観点から整理され、学年ごとに配列されているからである。



二つ目は、育てたい力をカリキュラムとしてどう捉えているか考える場合に、一番テーマになっているのが、避難訓練とその他の各教科等を含めた諸々の活動との関係である。避難訓練に全て特化するのか、日常の各教科等の授業そのものすべてが防災教育につながると考えるかである。市や学校はこのテーマについてどのように考え、それをカリキュラムとしてどう表現しているのか、校長の仕事は、自身の言葉で、作られたカリキュラムを保護者や地域に語っていくことである。

三つ目は、今回配付された教育実践事例集を見てほしい。内容は実践の事例であるが、それを教育課程の枠組みに則って、整理し関連付けている。

震災を踏まえた具体的な成果物の一つがこの冊子だ。これを一つのたたき台にして、それぞれの地域の実践に応じた展開をしていくときに意味のあるものになる。

(4) 課題2に関する意見交換

○猪股 【課題2】学校が地域づくりの核として機能していくために校長がなすべきことは何か。

○村岡 【学校と地域を結ぶ、震災体験を語る授業】

阪神淡路大震災後に、防災福祉コミュニティができた。これは、それまで地域にあった諸団体を防災福祉の視点で組み直したものである。学校と地域が、かたく結ばれた。

震災体験を語る授業では、焼けた地域の町づくりを子どもたちが考えようという地域教材を起こした事例や学校に避難している小さい子のためにボランティアとして紙芝居の活動を行った事例、地震のときに亡くなった子のためにいろいろな言葉をつなげて歌を作った事例などがある。

震災を経験した者が生の声で語っていくことや、学校だよりで震災や防災で忘れてはいけないことを子どもや保護者、地域に発信するのも、地域とつなぐ一つのキーポイントと考えている。

○森 【地域と共に歩む学校づくり】

勤務する上所小学校は、創立141年の学校である。そのような学校でも地域の中に学校があり、地域と共に歩む学校でなければならない。様々な活動を地域と共に行うだけでなく、学校が発信源となって進めることも必要である。もう一つは、新潟地震50周年に向けた合同防災訓練実施への仕掛けである。新潟市には全ての学校に地域協力コーディネーターが配置されている。その方を核として、学校・地域一体の取組を進めている。

○山本 【仲良く連携、情報の共有】

静岡市の自主防災組織は、昭和45年の七夕豪雨の際に立ち上がり、昭和51年に東海地震説が出たときに組織が拡大した。日頃から連携を取ることでも踏み込んだ関係を築いている。静岡では、各連合町内会の自主防災会議で学校・住民・市が連携し、避難所の運営方法や地域防災訓練等の話し合いを行っている。学校からも地域の防災訓練に参加を呼び掛けている。静岡市には、地域づくりの核として学校応援の組織があり、コーディネーターが地域の柱として、静岡市を13の区に分けて各学校と関わっている。

○仙台市立原町小学校長 遠藤 和彦

【双方向の地域連携】

前任の岡田小学校は約3か月間避難所になっ

た。避難所として、ほとんどの教室を開放した。この間、教職員は食料の配給など避難所運営に従事したが、このまま避難所運営に教職員を関わらせることはできないと判断した。3月12日、723名の避難者に3日後に避難場所を体育館に移すこと、避難所運営には校長のみが関わることを提示したところ、すんなり同意していただいた。日頃からの学校、教職員と地域社会との信頼関係づくりの大切さを痛感した。同時に、教職員だけでなく、子どもたちにも関わらせていく必要性を感じた。頭に浮かんだのが双方向の地域連携である。

○ 堺市立茶山台小学校長 西尾 宜精(指名発言)

防災は一学校一担当でできるものではない。地域・保護者・専門機関との協働で、災害に強い町づくりをするという気概を持って当たらないと進まない。前任校で、連合町内会長に防災について協力を依頼したところ大変喜ばれた。この地域は避難弱者である高齢者が多い地域であるが、「学校も一緒に防災活動を行うという話が広まると、高齢者の方の参加も期待できる。」という話をいただいた。

○ 天笠 【棲み分けと結合】

地域と学校を考えたとき、学校の立場では棲み分けに比重を置くのが現状であろう。指定都市は難しい地域を抱えており、なかなか接点を持ちづらいたろうが、むしろ結合という思考が大切であり、防災は結合を進めていくうえで格好のテーマになる。防災は、学校がリーダーシップを取ることができるし、災害、防災に強い学校づくり、地域づくりにつながっていくように思う。棲み分けの立場はあるが、もう一度大きく結合という部分を考えてみるのが、この一連の展開の方向性ではないかと思う。

全体を通して、昨日の分科会等々の関わりを含めて話をしたい。一つ目は、子どもたちを引き渡さないということ。避難訓練の一つのポイントに、いかに子どもを保護者に引き渡すかがテーマであることは間違いないが、今回の東日本大震災の教訓を受けるならば、基本的には、引き渡さないのが一つの大きな教訓である。

二つ目は、自助・共助・公助である。学校を一つの単位にして自助・共助を考えたときに、学校はある段階、ある局面において、自助を考えざるを得ない局面に置かれることがあり、そこから制

度の見直しやめりはりを付けるといった話になってくる。ただ、制度的にあるものを整えていくか、公的なものを備えるにしても、学校は、災害の発生時においては、公助が来るまで、その間をどうしのぐかは校長の判断である。共助については、今回の震災では1校で支えていたが、長期に及んでくると、1校だけでは支えきれない。そのときに連携が大切になる。仙台市の校長に話を聞くと、神戸市の教訓がいろんな意味で支えになっていた。正に、自治体のエリアを越えての支え合いがある。今回こういう形で研究協議をすることも、それぞれの自治体のエリアを越えて情報を共有し合い、交換し合うという、いわゆる支え合いというものを目指していると言える。

最後に、冒頭、日本教育経営学会で調査をさせていただいたことを申し上げたが、調査は、かなり深刻な被災をされた地域や学校、あるいは震度5以上の大きな揺れにあったところを対象にした。家族や親戚に被災した人がいるか尋ねたら、回答した学校関係者の8割が身近に被災者がいると回答した。回答された先生方は、それぞれが学校で子どもたちの命を守る役割を果たした。身近に被災された方々を抱えながら、その中でも支えたということである。おおむね学校にいた子どもたちの命が救われたことは、奇跡とか偶然ではなく、そういう先生方の命を守る働きがあつてのことである。世の中はそれを現場力という言い方で称賛したが、その一角には教職員も学校関係者の方々も、しっかり位置付いていることを申し上げさせていただき、ここで共有させていただきたい。

6 閉会式

- | | |
|----------------|-----------|
| (1) 開式のことば | 副会長 針生 弘 |
| (2) 大会会長挨拶 | 会長 堀越 清治 |
| (3) 大会宣言 | 副会長 熊谷 和彦 |
| (4) 次期開催指定都市挨拶 | |

広島市小学校長会長 西本 正頼

- | | |
|------------|------------|
| (5) 閉式のことば | 実行委員長 渡部 力 |
|------------|------------|

千年に一度といわれる大地震の被害を受けた仙台市で開催された本研究協議会。先人が受けた衝撃と同じような、または先人をしのぐ言葉が心に刻まれたのではないか。大会主題「夢と希望を持ち、たくましく生きる子どもをはぐくむ」を今一度、共有したい。本研究を支えていただいた天笠先生、貴重な提言・発表をいただいた先生方に感謝申し上げ、皆様に支えられた仙台大会を閉じる。



生徒指導部から

東日本大震災から3年目を迎えての取組

～子どもたちの健やかな成長を願って～

生徒指導部長 菅野 正彦（上杉山通小学校）

1 はじめに

東日本大震災から3年目を迎え、復旧・復興も大分進み、各学校では落ち着いて教育活動を進めることができる状態になった。しかし、まだ仮設校舎に入っていたり、他校の校舎を借りたりしている学校もあり、何とか早く良い環境で楽しい学校生活を送らせたいと願うものである。

震災後数年たってから子どもたちの心が荒れてくるといふ阪神淡路大震災の教訓を受け、生徒指導部では、警鐘を鳴らし対策等について啓発を図ってきた。震災後の混乱した状況が、子どもたちへ影響するのではないかとの声も聞かれる。

今年度、生徒指導部では、東日本大震災から3年目の状況と校長としての対応についての調査を継続し、更に「いじめ防止対策推進法」が制定されたことを受けての研修会も開催した。また、故郷復興プロジェクトの一環としての「七夕飾り作り」にも、市内全小中学校、特別支援学校、中等教育学校で取り組むことができた。

以下は、その具体的な取組である。

2 「東日本大震災に関わる校長としての対応に関する調査」について

今年度は、これまでの2年間の調査結果を踏まえ、震災発生後2年6か月時点での各学校の状況や校長としての取組等について継続調査を実施した。また、仙台市として進めている「故郷復興プロジェクトの目的」や「生徒指導問題等懇談会の報告書の提言」を受けて、調査の重点事項を「自助・共助の力を育み、たくましく生きる力や豊かな心を育てていく取組」と設定し、調査を実施した。

調査の結果、2年半経過した今でも、心のケア等の配慮を必要とする児童がいることが分かった。

「心のケアに関する取組」では、教育相談体制を見直したり、関係機関との連携を深めたりして充実を図ってきた。また、「心の教育に関する取組」では、「自己肯定感」「自己有用感」を味わうことができる活動や取組、異年齢の子どもや地域と関わる活

動や取組に力を入れていることが分かった。詳しくは、研究紀要をご覧ください。

3 生徒指導研修会について

私たち校長は、常に様々な問題や課題に直面しており、対応や判断に迫られている。その場合、法律的な裏付けを持ちながら対応できれば、よりよい解決に導くことができる。

今回、「いじめその他の諸問題への対応」について、弁護士から講演をいただいた。いじめ問題の解決のために、学校としてどう対応すべきか大変役に立つ貴重な話を聞くことができた。今後、事案対しの確な判断を行い、児童や保護者に適切な対応ができるようにしていきたい。

4 仙台七夕「あしたにかがやく星に願いを～復興への思いを忘れない～」について

今年度の七夕飾り作りは、3年目を迎えることから、コンセプトを「復興に対しての思いを忘れず、児童生徒の思いを共有すること」「七夕飾り作りの過程の中で、児童生徒全員に関わる場面を作っていくこと」とした。作製に当たっては、上学年が下学年に折り方を教えたり、PTAや学校支援地域本部の協力を得たりするなど、各学校で工夫しながら進めることができた。七夕当日、多くの人が完成した七夕飾りの下で足を止めていたのが印象的であった。

5 おわりに

周りを見ると、穏やかで何もなかったような風景が続いている。しかし、子どもたちの心の中には、まだまだ震災の傷跡が残っている。子どもたちの健やかな成長を願うとともに、将来に向けて一人一人が強い心を持ち、夢や希望を大きく持って進んでもらいたい。



提言

復興に向けた創造ある教育

被災地との交流 ～共に生きていこう～

第1地区 菅原 一郎 (生出小学校)

本校では、平成23年度から石巻市立雄勝小学校との交流を続け、今年度で3年目を迎える。東日本大震災後、雄勝町から避難してきた当時5年の児童が、本校に転入したことがきっかけで始まった。

6年生と児童会が中心となって、雄勝小と交流をしようということになり、具体的な取組について話し合った。募金や励ましの手紙を送る活動などを通して、自分たちが雄勝小の子どもたちを支援したいというものであった。

6年生では、同時に総合的な学習の時間に「震災を考える」という学習を始めた。震災被害の概要について知るとともに、同じ時代に生きる者としてどんなことをしたらいいのか考えることをねらいとした。

平成23年度は、募金活動、避難所体験学習、そして雄勝訪問を行った。募金の一部で材料を購入し、雄勝小の全児童分のランチョンマットを手作した。また全校児童のメッセージを載せた凧も作った。これらと残りの募金を雄勝訪問の際、雄勝小に贈っ

た。雄勝には、5・6年生が訪問し、被災した雄勝小の見学、雄勝小との交流会、雄勝玄昌石への絵付け体験等を行った。

平成24年度、25年度は、雄勝小の子どもたちと、生出の学童農園で米作りを行った。両校の5・6年生が一緒に田植えと稲刈りをした。自分たちが植えた米を収穫できる喜びを感じながら、生き生きと活動することができた。

23年度に引き続き、24年度も5・6年生が雄勝を訪問した。水産業や硯産業の体験学習を行った。それぞれの仕事に携わる人々の、復興に向けて力強く前進している姿を見ることができた。また、雄勝小では、5年生のホタテ養殖についての総合学習の発表会に参加し、一緒に学習した。

お互いの故郷で、それぞれの土地の生業について共に学習し、故郷のすばらしさを改めて認め合うことができた。そして、雄勝小の子どもたちや復興に取り組む現地の人々と交流する中で、共に生きていこうという連帯感が育ってきている。

提言

復興に向けた創造ある教育

「自他共栄」の精神を大切にして

第3地区 中村 昌人 (野村小学校)

復興元年である昨年度、私は、卒業式で、「自他共栄」という言葉を、はなむけとして授けた。

これは、相手を敬い、感謝することで、信頼し合い、助け合う心を育み、自分だけでなく他人と共に栄えある世の中にしようとすることを意味している。

本校では、これまで以上に「自他の関わりを大切にする人づくり」を基本と捉えて、学校経営を進めている。私は、復興教育を進める基本を、新たな事業を起こすことではなく、本校が継続してきた教育内容を見直し、再構築することであると考えている。見直しを図った幾つかの例を紹介する。

まず、ヒマワリを育てる緑化活動や清掃中心の美化活動では、活動に先立ち、私は、子どもたちに、いつも見守り、支えてくださる故郷の人々を思い、その方々との触れ合いや関わり合いを想起するよう語り掛けた。その結果、身近な故郷の方々への感謝の気持ちを込めて、一生懸命活動するようになった。

同様に、挨拶についても、明るく元気に、そして関わり合う喜びや感謝の気持ちのこもった挨拶がで

きるようになってきている。

また、11月の学習発表会を、保護者だけでなく地域の方々にも、日頃の感謝を表すとともに、被災地全体の復興を願う本校の姿を見ていただく絶好の機会と捉えた。会に先立ち、全校児童と教職員による復興ソング「希望の道」を披露した。併せて、被災校の実態と復興に向けた全市的な取組を説明することにより、多くの参加者の共感が得られ、学校と保護者、地域の絆の強まりを実感することができた。

復興に向けた様々な活動に、「人との関わりを大切にする心」や「感謝する心」を重視して取り組むことにより、子どもたちの心には、我が故郷、我が学校を大切にしようとする思いや、地域一丸となって被災地の痛みを理解し、共に進もうという思いが、一層強まったように思う。

復興教育が学校教育推進に果たす役割は大きい。その推進に当たり、「自他共栄」の精神に基づく「自他の関わりを大切にする人づくり」を今後も重要な柱として、学校経営に邁進していきたい。

提言

復興に向けた創造ある教育

今こそ、地域の中で子どもたちの活躍の場を

第5地区 佐藤 悦雄（榴岡小学校）

榴岡小学校は、以前から「学校支援地域本部事業」や「学びのコミュニティづくり」、「弟子入り留学」など地域と様々な形で連携を続け、地域からたくさんの方の支援をいただいています。それに対し、子どもたちはその恩返しとして、夏祭りには、1・2年生が「すずめ踊り」で参加したり、Kスタの盆踊りに3・4年生が「エイサー」で出演したりして、地域の方々から大変好評を博しています。また、地域防災訓練には、少年消防クラブが参加し、応急手当、消火活動などを地域の方と一緒にしています。

ところで、「仙台市生活・学習状況調査」の結果に、震災前の平成22年と震災後の平成23年・24年・25年を比較したグラフがあります。「人の気持ちがわかる人間になりたい」「人の役に立つ人間になりたい」「人が困っているときは、進んで助けている」などの設問に対して、震災前は学年が上がるにつれて「はい」と回答している人数の割合が大きく減っていました。しかし、震災後は、「はい」と回答している割合が大幅に増えています。東日本大震災を

通して、子どもたちは観念的な道徳観、正義感など、苦しいときの思いやりや優しさを現実的に体験し、その大切さや有難さを身にしみて分かってきたのかもしれませんが。

しかし一方では、「自分には良いところがあると思う」という設問の回答が、どの学年も震災前より低くなっています。つまり、子どもたちの規範意識は高まる一方、自己肯定感・自己有用感は震災前よりも低下したということになります。

学校は、防災面や安全面でこれまで以上に地域との連携が求められています。今後は、地域の一員として、子どもたちに育ってきた規範意識を、地域の中で具体的な実践につないでいくことが大切であると考えます。そして、このような活動を通して、子どもたちに充実感や達成感を味わわせ、自己肯定感・自己有用感を高めていくことが喫緊の課題に役立ていくことになるのではないのでしょうか。

提言

復興に向けた創造ある教育

地域と顔の見える関係づくり… 児童も 職員も…

第7地区 石野 勝美（長町小学校）

私は、本校に着任してから、校長として地域の方々との顔の見える関係づくりに努め、また、児童の活動に協力をいただいた地域の方々の声に積極的に耳を傾け、教育活動の改善・充実の一助としてきた。

大震災を契機に始まった「故郷復興プロジェクト」の活動は、協力をいただいた地域の方々から学校や児童への思いを伺う貴重な機会となった。本校では、朝の挨拶運動や地域の方々への感謝の会、地域の方々の授業参観などを行ってきた。その度に、震災体験から、児童と地域の人とのつながり、顔の見える関係づくりが重要であるとの声を頂戴した。

そこで、昨年度は、地区子ども会を単位とした縦割り活動の「子鹿集会」に保護者や地域の方々にも参加していただき、防災教育の一環として、地区ごとの安全マップづくりを行った。児童は、地域の人たちと活動し、地域の人に認められたことを喜び、満足した。地域の方々にも、同じ地区の児童と活動したことを喜んでいただいた。また、今後も児童と活動することを望む声が多く寄せられた。

今年度は、前年度の取組と地域の声を踏まえ、「子鹿集会」の時間に、保護者と地域の方に参加していただき、「自分たちが住んでいる地域のためにできること、したいこと」について話し合った。参加していただいたある町内会長は、「子どもたちは、地域のために、こんなことまで考えているんだ。」と驚き、「子どもたちの思いが実現できるように、一緒に取り組みたい。」と話してくださった。

児童が、身近な地域のために考えたことを発信し、地域の人と協働するという活動は、地域社会で世代間の垣根を越えて協働する人材、復興を支える人材の育成にもつながるものと思う。これから、地域の協力を得て、児童が発信したことを実現させ、継続的な取組に発展させていきたい。

そのためには、児童だけではなく、校長はもちろん職員も地域の方々との顔の見える関係づくりを進める必要がある。職員が直接地域の方々と顔を合わせ、思いを交わしてこそ、充実した取組が継続して実現できるものと思う。

新任校長所感

震災から学び、
復興に取り組む私の学校経営未来を拓く子どもたちを、
地域とともに

峯岸 新造（湯元小学校）

震災が発生したのは、私が連坊小路小学校の教頭として、1 年目が終わろうとしていたときでした。

あの雪の舞う、寒い日でした。

私は、非常用放送設備のマイクを握り、教室にいる児童にその場での安全確保を呼び掛けるとともに、子どもたちを教室からいつ避難させようかと、大きな揺れの中、「早く止んでくれ、このままもっともっとひどくなるのか」と不安な気持ちで待っていました。それでも長い長い揺れが続き、揺れが収まるのを待っていたら危険だと判断し、校庭への避難指示を出しました。

校庭には続々と保護者、地域の人、仙台駅からの帰宅困難者が押し寄せて来ました。校庭にそれほど人が集まったことはありませんでした。夜遅くまでかかり、子どもたちを保護者に引き渡しました。その夜は、電気の消えた体育館で、所狭しと身を寄せ合って不安を隠せない避難者を見つめ、ラジオに耳をそばだてながら長い時間を過ごしました。

少し大きな余震があるたびに、あのときのことが鮮明によみがえってきます。

♪ 夜空 見上げて 思い出す

あの日の 星のかがやきを

日差しを浴びて 思い出す

あの日の人の あたたかさ

だれもが みんな 助け合い

だれもが みんな 支え合った

同時に、この復興ソング「希望の道」の歌詞のように、あの日の星空、みんなの助け合い、支え合い、協力を忘れることができません。

私は、どの学校であれ、未来を担う子どもたちに、どんな困難・災難に遭っても仲間と手を取り合い、協力し合い、支え合って、これ乗り越える知恵と力と心を育てていくことが、校長としての使命であると思うようになりました。

「強く正しく 明朗に 日々に努めて 身と心 練りて鍛えて 一斉に 國と郷とに 尽くすべし」

秋保地区の三校（秋保小・馬場小・湯元小）の校歌にうたわれるように、子どもたちの大切な命を守ることを第一に考え、保護者や地域住民と手を携え、教職員の英知を結集し、地域・家庭・学校の協働体制の下、学校経営を推進し、湯元の子どもたちをみんなで育てていきます。

毎朝、子どもたちの通学路を見回り、ゴミを拾ったり、子どもとの会話を楽しんだりしています。学校内外で地域の方々や子どもたちとの触れ合いを大切にしながら、未来を拓く湯元っ子の育成に当たっていきます。

初めての町内会連合会との
合同防災訓練

武田 洋（太白小学校）

東日本大震災の教訓を踏まえた「新たな防災教育」の一環として、地域との合同防災訓練を本年度から始めました。

これまで様々な支援をいただいていた町内会連合会の皆様とPTA役員の皆様を中心に、太白消防署、太白区役所、避難所開設時の本庁担当課、日本赤十字社の皆様が顔をそろえ、打ち合わせを重ねながら当日を迎えました。

学校では、児童の自助・共助の力を付けることを目指して訓練計画を立てましたが、進めるに当たって校長として願ったことは次の三点です。

○学年単位の訓練課題を設定し、6 年間のスパンで災害に対する正しい対応の仕方を身に付けさせたい。

○身の周りで困っている人に、自分ができる手助けを通して、児童に自己有用感を持たせたい。

○児童一人一人が地域の中で知り合いを増やして、日常的に声を交わし合うことができる関係を地域の方と共につくっていききたい。

防災訓練当日は、1 校時に防災教育に関わる授業

参観も行い、各学級の様子を保護者に見ていただきました。

その後、保護者の皆様には一足早く防災訓練に参加いただき、児童は3校時から訓練に加わりました。

実際に行った訓練内容は、以下のとおりです。

- ◆濃煙体験 参加者全員
- ◆バケツリレー 1・2年生
- ◆消防車説明 1・2・3年生
- ◆初期消火訓練 3年生、地域の大人
- ◆通報訓練 4年生、地域の大人
- ◆炊き出し訓練
 - ・炊き出し 地域の大人
 - ・配食 5年生、地域の大人
- ◆応急救護訓練 6年生、地域の大人

今回の防災訓練は、初めて地域と合同で行うということもあり、地域の方々と今後も連携していく上での課題がいくつか出てきました。次年度からは、そこを改善しながら進めていきたいと考えています。

地域とともに

伊藤 隆友（中山小学校）

私は震災当時、人來田小学校に勤務していました。幾度となく余震が続き、雪が降る寒い中、午後8時まで児童の引渡しを行ったのが、つい昨日のように思い出されます。

あれから、2年と7か月が過ぎました。現在勤務する中山小学校では復旧工事がすべて終わり、震災前と同じ生活を送っています。

ややもすると、復旧が進めば進むほど、震災が遠い昔の出来事だったかに思えてきます。私たちは震災のことをしっかり記憶にとどめ、二度と起こらないことを願うとともに、万が一の時のために準備しておくものは何なのか、いろいろなシミュレーションを重ねていかなければなりません。

今年度の夏、本校では、おやじの会主催で、防災キャンプを行いました。土・日曜日を利用した一泊二日の活動です。参加は20組の親子で、土曜日の午後は子どもたちが四つの班に分かれ、地域の各家庭を訪問し、震災当時の様子を聞き取り取材しました。

日曜日の午前中は取材内容をまとめ、その後、各班ごとの発表会を行いました。そこでは、震災のために常に備えておかねばならない物や、実際に地震が起きたときに家族一人一人がどう行動すればよいのかなど、経験を生かした具体的な事柄が発表

されました。また、震災の被害状況を参考にして、1枚の模造紙に中山小防災マップを作成する班もありました。今回はおやじの会主催でしたが、学校の防災教育でも、このような活動を取り入れていく必要があると感じました。

また、先日は、地域の防災訓練が行われました。震災時、先頭に立って活躍して下さった町内の防災部長さんが、今回もしっかりした計画を立て、地域の方々をまとめていました。各町内会ごとに役割分担が決まっており、それぞれ担当箇所ごとに責任を持って役割を果たしていました。

さらに、日本赤十字社の協力の下、炊き出しも行われました。青葉消防署の救急救命の講習会、パネル展示、備蓄物資の確認、無線機の使い方の説明が行われました。毎年、このような訓練が行われれば、いざというときにも落ち着いて行動できるのではないかと感じました。学校としては、ここに保護者や子どもたちも交えて訓練できたら、一層地域防災の充実が図られると考えています。

私たちは、いつ起こるか分からない震災に対して、迅速に対応するための様々な準備を、日頃からしっかり行っておく必要があると思います。

仲間・地域とともに

葛西 雄二（川平小学校）

復興ソング「希望の道」を歌うと、大震災の時の記憶がよみがえってきます。地震が起きた時のこと、校庭に避難して引渡しをしていた時のこと、そして、体育館やホールを避難所にして過ごした夜のこと。

これまで経験したことがない大きな地震とニュースで伝えられる大津波の被害の様子に、教職員も避難してきた人たちも、驚きと不安、そして先が見通せない状況の中でとても混乱していました。

そのような中、当時私が教頭をしていた学校の校長は、まず、児童の安全確保・確認と保護者への確実な引渡しを最優先して行うこと、避難者を可能な限り受け入れることを決断しました。

避難所開設や初期の運営では、戸惑いや混乱することが多々ありましたが、同僚の教職員やPTA役員・地域の方々、役所の担当課職員の協力を得ながら何とか進めることができました。また、避難所運営には、避難してきた方々がボランティアとして名乗りをあげてくださり、役割分担をして避難所の運営を担っていただきました。避難所は3月末まで続きましたが、PTA役員・地域の方々・ボランティア

が避難所運営を主として担い、教職員は、諸行事や学校再開の準備を進めることができました。

大震災から3年目となりますが、災害時に特に大切なものは、災害に対する日頃の備えと同僚や身近な人たちとの協力体制だと考えています。

本校学区の連合町内会では、今年度10月に「総合防災訓練」を実施しました。町内会の防災部が全体指揮をとり、初期避難、安否確認、指定避難所の開設及び初期運営まで、シミュレーションを交えながら、実際の流れに従って実施しました。小学生のバケツリレーや中学生の仮設トイレ組立ても行いました。

学校では、避難訓練や朝会などで、自助・共助の話をしています。災害に遭遇した時に、自分の命を守るためにどのように行動したらよいか、大震災の時に地域の方々に支えていただいたことを忘れないことなどです。また、教職員には、防災マニュアルの確認、災害備蓄品と保管場所の周知のための研修を実施しました。今後も、防災教育の更なる充実に努めていきます。

昨年度に続き今年度も、桜丘中・桜丘小・川平小有志児童で被災地訪問をしてきました。合唱・合奏の交歓会や慰霊碑への献花をしました。故郷復興プロジェクトで、その時のスライドや感想を発表しました。被災地の一員として、自分たちができることは何かを考え、行動できる児童を育てていきたいと思っています。

自他の命を守り 共に助け合う力を育てるために

高砂 淳子（実沢小学校）

震災当時、私は県の教育事務所に勤めていました。管轄する13の市町村の中には、児童生徒が亡くなった学校、他校での学校再開を余儀なくされた学校が数多くありました。避難所運営、親や友達を亡くした児童生徒への対応、学校再開への準備、泥だらけになった諸表簿の復元作業等々、過酷な状況下で児童生徒のために奮闘する先生方の姿を目の当たりにし、言葉がありませんでした。その中には家を流され、家族や同僚を亡くした教職員もたくさんいたのです。つらく苦しい体験を乗り越え、前に進んでいく力を児童生徒に与えようとする教師の使命感に突き動かされていたのだと思います。

ライフラインが寸断された中で、日がたつにつれ、それぞれの学校がどのような避難誘導を行ったのか

も分かってきました。校長の判断で、ぎりぎりのところで児童生徒の命を守った学校があったことも知りました。マニュアルだけでは対応しきれない状況に置かれ、猶予もなく次々に決断を迫られたであろう校長としての職責の厳しさを感じました。

校長になった今、その責任の重さを改めて噛みめています。震災時、本校の学区内の建物被害は軽微でした。ライフラインも何とか確保できたことから、避難所も開設しませんでした。児童は大地震によるショックはあったものの、落ち着いて学校生活を送ってきました。これは本当に幸いなことです。本校の児童は、校内や学区内にいる限りにおいてはある程度の安全が確保できると考えられます。

しかし、学区外で、あるいは将来、実沢を離れて暮らす土地や仕事先で自然災害に巻き込まれることがあるかもしれません。どこにいても、いついかなるときでも自身や周囲の人々の身を少しでも安全な方向に導き、命を守ることができるようになることが大切であり、そのための知識、判断力、行動力を身に付けることがこれからの防災教育に求められていると思います。生涯にわたる防災能力の習得です。

「防災教育の充実」は、本校の協働型学校評価の重点目標でもあります。防災教育全体計画や指導計画、市の副読本を活用した授業づくりについて更に研修を深め、着実に実践していくこと。その授業を保護者に公開し、共に考えながら防災意識を高めていくことに努めていきたいと思っています。そして、学校と地域が一体となった防災研修や防災訓練の在り方を地域の方々と一緒に探りながら「絆」をより強くし、地域・家庭・学校が助け合い、支え合って行動する姿を児童に示していきたいと思っています。

「福興」をめざして

板橋 高広（福岡小学校）

私は、震災当時、七北田小学校の教頭でした。マンションの被害が甚大な上、ライフラインが寸断され、最大1,000人を越える方々が体育館に避難してきました。学校主体の避難所運営となりましたが、「地域共生科」の学習活動を通して、普段から地域との関係を大切にし、地域と学校がお互いに顔の見える関係になっていたことで、あの極限の中でも、協力し支え合うことができました。

現在校の地域では、幸いなことに、自家発電機を持っていたり、プロパンガスを利用したりしていたことで、ライフラインが保たれ、避難所生活を送る

家庭は少なかったと聞きました。子どもたちにとって、大きな揺れの恐怖はあっても、その後の生活の不自由さは都市部と違ってあまり感じていないようでした。さらに、津波被害に遭われた人が地域に住んでいないこともあり、震災についての記憶がどんどん薄れていくのではないかと感じられました。

そこで、「決して、忘れない」「伝えていく」ことを念頭に置いた防災教育が必要と考え、副読本を積極的に活用した実践に取り組んでいるところです。また、新たな防災計画、地域防災訓練実施の可能性の有無など、地域の実態を十分に考慮して検討しています。

さらには、「子どもたちの力で、福岡地区をもっと元気に！」「子どもたちの力で、福岡地区を幸福に！」という思いで、「復興プロジェクト」を立ち上げました。小さなことではありますが、「保存会の方に力をいただいて伝承活動として取り組んでいる『鹿踊剣舞』を地域の人に披露して元気にする。」「地域の方々にも進んであいさつをして、福岡地区を笑顔いっぱいにする。」など、自分たちの力でできることを地域に発信していくことを大事にしています。

このように、地域の宝である子どもを通して、地域・家庭・学校がしっかりとスクラムを組み、信頼関係を構築することが、何よりも大切であることを、あの震災から学びました。

幸い、地域の方々は、子どもたちをかわいがり地域にある学校を「おらほの学校」として温かく包んでくれています。校長として、現状に甘えることなく、さらに絆を深めていく努力を率先して行わなければならないと決意を新たにしています。

地域と連携した防災教育を

高橋 純子（旭丘小学校）

3月11日の東日本大震災時、津波で大きな被害を受けた荒浜小学区に隣接する七郷小学校に勤務していた私は、一時は2,000人を超える被災者の方々のための避難所運営に当たる日々を経験しました。そこで、被災者の思いを受け止め、学校の職員としてでき得る限りの力を尽くして避難所運営に当たりながら、子どもたちの命を守る立場にある管理職の責任の重さについて深く考えさせられました。

その後の転勤により、直接的な津波の被災地から徐々に離れていきますが、復興への支援とともに、そのときの経験を現任校の子どもたちにどのように

伝えたらよいのか、防災教育にどのように取り組んだらよいのかは、常に私自身の課題でした。

幸いなことに、現任校旭丘小学校の校舎は、大きな被害がありませんでした。3月31日で、避難所も閉鎖できたと聞いています。

ところが、地域の方々の防災への関心は高く、現在は、旭ヶ丘連合町内会を中心とした作業により、地域の防災マニュアルが完成しています。東日本大震災のときに、避難所としてどのような運営を行ったのかについての記録集も作成されています。あのときの経験を風化させることなく、後世に伝えようという町内会の方々の熱い思いがあるので、防災教育への取組にも地域の方々は非常に協力的です。

旭丘小学校では、総合的な学習の時間や生活科の時間において年間15時間、防災に関する教育を行っています。今年度は6月17日を防災訓練の日と定め、全校一斉にメールの配信、防災学習、緊急時の給食体験、児童引渡し訓練等を行いました。

特に防災に関する学習では、子どもたちに自助・共助の力をつけたいと考え、各学年において次のような活動に取り組みました。

- 1年生・・・安全な学校生活の視点からの学校探検
- 2年生・・・安全な町という視点からの町探検
- 3年生・・・通学路の安全マップづくり
- 4年生・・・自然災害に備えた气象台の方の出前授業
- 5年生・・・災害時のエコクッキング
- 6年生・・・災害時に自分にできることの話合い

どの学年でも、学校支援地域本部の力をお借りし、保護者や地域の方々にゲストティーチャーとして協力していただきました。

地域全体で、「災害に強い町づくり」を目指している旭ヶ丘。明日の旭ヶ丘を担う子どもたちに、地域の一員として、地域のために進んで行動できる力を育てていきたいと考えています。

本校舎でのスタート

津久井 隆之（将監西小学校）

本校は、あの震災で校舎が使用できなくなりました。そのため、隣の桂小学校で約7か月間生活し、その後校庭に建てられた仮設校舎での生活を経て、この4月1日に本校舎へと戻り、新年度がスタートしました。この間に在籍していた教職員や児童、また、保護者・地域の方々のこれまでの努力に、頭が下がる思いです。私は、4月に着任し、前任者が努力し、築いてきたものを引き継ぎました。

「さわやかなあいさつと思いやりいっぱい」の将監西小学校」は、本校の協働型学校評価の重点目標です。4月からようやく本校舎での生活がスタートしたものの、校庭はプレハブ校舎解体のため5月末まで使えず、さらに11月から、全面整備のため再び使えなくなりました。そのため、運動会や学習発表会の日程が、大幅に変更になりました。

「こんな時だからこそ、子どもたちに笑顔と思いやりの心を育てたい。」「校庭が使えない子どもたちの体力を向上させるためにはどうするか。」「校長としてできることは？」日々考え実践してきました。

重点目標を具現化するため、まず考えたのは、子どもたちの前で話す朝会でした。ある先輩の校長先生が、「校長先生の話聞くために、わざわざ全校児童が集まってくるんだぞ！」とおっしゃっていたのを思い出したのです。私も「この時間を大切にしなければ…」と思い、一人一人の子どもたちに少しでも私の思いを伝えられるように、言葉だけでなく視覚でも訴えようと考えました。ある日、廊下で出会った子どもから、「校長先生は、物づくりが得意なんですね。」と声を掛けられ、「どうして。」と尋ねると、「だって校長先生が話をする時、何か作った物を見せてくれて、分かりやすいんだもん。」と言ってくれたのでした。その時は、「少しでも校長の思いが子どもたちに伝わっているのかな。」とうれしく思いました。

現在は、毎朝始業の前に、「おはよう！」のあいさつやハイタッチ、最近の話題（楽天優勝等）、勉強のことなどの話をしながら、全学級を回っています。さらに、校庭の使用が制限されているため、近くの公園の借用や体育館の開放、業間休みの延長、狭いスペースでの体力向上、運動量確保のための体育の授業の工夫などに重点を置いて、学校経営を進めています。

大震災という大きな災害後、いろいろな面で学校教育が変わりました。今、子どもたちの輝く姿を地域に発信し、震災復興に向けた大きなうねりとなるように教育を進めてまいりたいと思います。

人とのつながり 心づかい・思いやり

菊地 範行（鶴が丘小学校）

これまでに経験したことのない大きな揺れは校舎の一部を破壊し、長い時間の揺れは、子どもたちにとってもなく大きな恐怖感を与えた。

「大きな津波が来ます。高台に逃げてください。」何度となく響き渡る防災無線からの声。津波警報を受け、声も出さずにじっと恐怖に耐え頑張っている子どもたちと一緒に、学校から高台にある幼稚園に避難した。時間が経つにつれ、泣き始める子どもたちを担任や友達が励まししながら、幼稚園の中の遊戯室に入った。

震災時、私は松島町の小学校に勤務していた。近くの大きなホテル等が避難所となったため、幼稚園には近隣に住んでいる方々が避難して来る程度で、子どもたちを中心にした対応をすることができた。

園庭から見える学校の校庭は、ゆっくり、ゆっくりと海水に埋もれていった。ふと、遊戯室の中をのぞくと、さっきまで泣き続けていた低学年の子どもたちが泣き止んでいる。そばには、高学年の子どもたちが寄り添い、力付けていた。きっと、自分自身も泣きたいくらい恐怖を感じ、つらい気持ちでいたはずなのに。

その光景を思い出すと、今でもじーんと熱いものを感じ、あの言葉を思い出す。「心は誰にも見えないけれど 心づかいは見える」「思いは見えないけれど 思いやりは誰にでも見える」、本当に思いやりがいっぱいの遊戯室であった。

今年度、本校では10月に、震災以降休止していた「秋のたてわり遠足」を復活させた。目的地は「県民の森」で、学校から徒歩で出発する。高学年の子と低学年の子がペアを組み、手をつないでの遠足である。アスレチックでの遊びもペア同士で。

実施後、上学年の児童に、「ペアの子とできるだけ一緒にいた？」「ペアの子に合わせて行動した？」「ペアの子と一緒にいて楽しかった？」と聞くと、80%ぐらいの児童が、どの項目も普段の生活以上と答えていた。実際、ペアで遊んでいる姿は本当にほほえましかった。きっと、低学年の児童は、頼れるお兄さん・お姉さんと見ていたに違いない。

普段は、同学年内の交流が主流になっているが、たてわり活動や異年齢の子ども同士の活動を通して、「人とのつながり」の大切さに気付かせ、心づかいと思いやりが素直に表現できる子どもたちを育てていきたい。



あの日の夜

花 渕 浩 司（高砂小学校）

高砂小に着任して、7か月が過ぎました。笑顔いっぱいの子どもたち、とても協力的な保護者の方々、「学校支援地域本部」を中心とした地域の皆様、そして、何事にも前向きな教職員に支えられて、校長としての日々を送っています。

新任校長として、これまでご指導いただいた多くの校長先生方の学校経営をよりどころにするとともに、昨日よりも今日が、今日よりも明日が、よりよいものになるようにと肝に銘じて、前へ進んでいきたいと思います。

多くの先輩校長先生の中で、特に思い出されるのは、震災の夜のある校長先生の後ろ姿です。当時、仙台市教育委員会に勤務していた私は、市内中心部の学校へ応援のために向かっていました。確か、夜中の午前2時過ぎだったと記憶しています。その学校は、仙台駅近くということもあり、地域の方々はもちろんのこと、帰宅困難者や近隣のホテルから避難して来た方々等、数千人という人であふれかえっていました。あの日の夜はとても寒かったのですが、その校長先生は、上着1枚で校門に立ち、避難して来た方々に、「ご苦労様です。」「大丈夫ですか。」と声を掛け続けていました。私が、「校長先生、代わりますから、どうぞ職員室でお休みください。」と勧めても、「ここは私の学校です。私が守ります。」と一歩も動くことなく、明け方まで校門に立ち続けたのでした。

高砂小学校には、住んでいたマンションが倒壊し、転居を余儀なくされた子どもがいます。福島から避難して来て、仮設住宅から通学する外国籍の子どももいます。震災により、保護者が職を失った子どももいます。間もなく震災から3年目を迎えようとしていますが、子どもたちの「心の復興」はこれからが本番です。そのために、校長としてできることは、子どもたちが安心して通える学校、笑顔が輝く学校をつくっていくことだと思います。

ある校長先生から、「校長は決断の連続である。」という言葉いただきました。悩んだ時、迷った時、あの夜の校長先生の後ろ姿を、あの夜の校長先生の一言を思い出すのです。校長は、最後の砦です。どんなことがあっても、校長が踏ん張らなければならないと思います。学校経営は、「一日にして成らず」だと実感している毎日です。

いつかは誰かのために

鈴木 一彦（東六郷小学校）

東日本大震災発生から、2年8か月がたちました。大津波で校舎等の教育設備が甚大な被害を受け、新たな教育の場として、六郷中学校の校舎1階と2階の1教室を使用して、元気に学校生活を送っています。

このような環境の中で生活できているのも、震災直後から小学校長会を通じて多くの義援金や全国各地はもとより世界中から励ましの手紙等の心温まる支援をいただいたお陰だと感謝しています。

子どもたちは校庭で元気いっぱい遊んでいます。すべり台、ジャングルジム、登り棒、低鉄棒等の遊具がないので、特に体力面では筋力の低下が顕著に現れています。そこで、週1回業前活動(8:30~45)を設定し、基本の運動や集団行動、鬼ごっこ等で敏捷性や走力を高める運動を取り入れて、体力の向上に取り組んでいます。今後は、瞬発力や持久力、投げる力を向上させるプログラムも取り入れていく予定です。

全校児童26名という少人数の学校なので、子どもたちには、特に外部の人との関わりが苦手という実態がありました。そこで、校外学習の中で、多くの方との関わりを持たせるような仕掛け(ミッション)を取り入れることにしました。今年度の5月14日に、4年生から6年生が縦割り班で、校外学習(自主研修)に出かけた時のことです。青葉城跡を見学コースに選んだ班には、見学に来ている人に班の集合写真を撮っていただくというミッションを出しました。見学をしている人に、なかなか声を掛けられません。でも、6年生の班長が勇気を出して、写真撮影をお願いすることができました。また、班の皆でお礼も言えて、何とかミッションをクリアすることができました。

校外学習からしばらくたった6月7日、修学旅行で福島にいた私の携帯に、教頭から「静岡からびわの実が届きました。」と連絡が入りました。校外学習で写真を撮っていただいた方から、送られてきたとのことでした。「震災で大きな被害を受けた子どもたちが、元気に活動をしている姿に感動したので、びわを送ります。」ということと、「静岡から、これからも応援しています。」とのメッセージも寄せられていたので、とても感動し、人との出会いの大切さを改めて感じました。

すぐに、子どもたちとお礼の手紙を書きました。

子どもたちには、「いつも多くの方に見守られていることを忘れずに、感謝して生活しましょう。」と話しました。

被災した子どもたちだからこそ、成長していく過程で、いつかは誰かのために、できることをやり遂げられる人に育てていかなければと強く感じました。

震災経験を生かす

渡部 定男（古城小学校）

東日本大震災発生時は、市内沿岸部の岡田小学校に勤務しておりました。仙台市の防災計画では、その地域は、津波避難エリア外でした。しかし、津波の際には、学校は、他の地域住民が避難してくる指定避難所にもなっていました。まさか学区の地域や校庭まで、津波が押し寄せてくるとは思いませんでした。地域住民が1,000名近く校舎や屋上に避難してきたので、校長の指示の下、知恵を出して、教職員が対応に当たりました。

校長のリーダーシップにより、避難所運営組織をいち早く立ち上げ、避難所運営を機能させることができました。また、避難所の初期対応と同時に、学校の早期再開に向けての計画的な対応を行い、スピーディーに学校を再開させることができました。校長のリーダーシップと日頃の地域の町内会との信頼関係が築かれていたことが、早期に学校を再開できた要因です。私は、校長には、緊急の時こそ、冷静な判断力やその先を読み取る力が必要であると実感し、多くを学ぶことができました。

本校の学区は、二つの連合町内会にまたがっています。校長として、まず、種々の会合に出席して、認知していただくよう努力しました。また、教職員とのコミュニケーションを積極的に図っていくようにしています。地域と学校が共に協力してこそ、子どもたちに良い教育ができるものと信じ、校長の思いを教職員に伝え、教職員も積極的に地域に足を運び、共に子どもたちの成長を育んでいけるように努めています。

被災した他校の小学生が、同じ地域で生活しています。子どもたちの復興への思いを共有し、児童会や6年生が中心になって、自分たちにできることを考え、「えがおで、だれにでも、まいにち、めをみて」を短くし、「え・だ・ま・め」のあいさつ運動を行っています。挨拶は大人の人にも元気を伝えることができます。私も朝に校門で子どもたちを迎えらるとともに、通行する方々へのあいさつ運動を児童

と一緒にしています。

今、津波や避難所運営を実際に経験して、常に身に付けさせなければならないと思うことは、子どもたち自身による安心・安全な生活の確保です。「自分たちの命は自分たちで守る」です。大きな被害のなかった地域の子どもたちなので、危機意識がやや低い傾向にあります。震災等から命を守るために、小学生でも、自分たちでやっておかなければならないことを、しっかりと学ばせていきたいと考えております。

さらなる防災教育の充実に向けて

堤 祐子（西中田小学校）

2011年3月11日、東日本大震災発生。当時、教頭として勤務していた東宮城野小学校は、即日避難所となり、約2週間その役割を果たすことになります。

避難所には、地域住民だけではなく、津波で壊滅的な被害を受けた荒浜地区の方々も避難して来られ、小さいお子さんを連れたご家族に、教室の片隅で暖を取っていただいたことを思い出します。

体育館が使用できないために、ホールに紅白幕を張り、職員総出で準備をして迎えた卒業式。

「こんな時だからこそ、6年生にはいつもどおりの卒業式をして、思い出を残してあげよう。」

あの時ほど、普通のことが普通にできるというありがたさを、心から感じたことはありませんでした。

また、もう一つの学校の役割として、津波で校舎が使えなくなった荒浜小学校の児童の受け入れがありました。荒浜小学校の川村孝男校長先生が、「ばらばらになっている子どもたちが、早く集まれる場所が必要。子どもたちに、早く元気になってほしい。」とお話なさったのが、学校の最高責任者としての痛切な思いとして伝わってきたのを覚えています。

さて、本校に着任してから8か月。本校の防災教育を進めるに当たり、キーワードとして「知る」「行動する」「関わる」「伝える」の四つを掲げております。本年度発刊された新防災教育副読本「3.11から未来へ」の活用、教科学習の中での防災に関連した学習、年3回実施される避難訓練、隔年実施の地域防災訓練、復興ソング「希望の道」等の素材を、先のキーワードと関連付けながら、児童に真の意味で身に付く防災能力を育てたいと考えております。そのためには、防災教育のカリキュラム整備が最重要課題です。

本校の防災教育カリキュラムは、まだ整理されて

おりませんが、11月2日に実施した地域との合同防災訓練では、それぞれの学習に関連性を持たせることで、四つのキーワードがつながり、学習効果が上がることが実証されました。具体的には、避難所確認の前に副読本を使用し、仙台市の避難所について学習します。そして実際に避難所を設置した体育館で、地域住民と児童が、震災に関する講話を聞き、お互いの考えを共有し合う、というものです。この経験によって、本校の教職員もカリキュラム整備の必要性を強く実感することができました。

来年度に向けて、先進校の事例なども参考に、本校の防災教育カリキュラムと実践内容を充実させていきたいと思います。

信頼される学校を目指して

相澤 経利（郡山小学校）

郡山小学校では、平成23年3月11日から10日間、学校と地域との協働による避難所運営が行われました。その対応の温かさと食事のおいしさは、近隣の避難所からうらやましがられたということでした。

なぜこのような避難所運営ができたのでしょうか。

それは、「日頃の地域と学校の密接な連携」の一言に尽きます。歴代校長先生や教職員が築き上げた地域との連携力と信頼関係が、この未曾有の状況の中で発揮されたのです。

学校と地域共催の「学区民運動会」は、学校と体育振興会、町内会との顔の見える関係づくりに大きく貢献しました。また、町内会ごとの夏祭りや運動会等の行事は、町内会の結束を強めました。さらに、おやじの会主催の「夜の学校探検」での食事作りは炊き出しに生かされ、父親が地域行事へ参加する

きっかけになったと感じます。

私は、今年度4月着任しました。前任の校長先生が準備した計画に基づき、5月に地域防災訓練を実施しました。1時間目は、全学級で仙台市教育委員会が作成した「防災副読本」を活用した授業参観を行いました。2時間目は、引渡し訓練と避難者名簿作り。3時間目は、町内会の皆さんや中学生も参加した防災訓練を実施しました。参加した皆さんからは、「自分の命は自分で守ることが基本になるんですね。」「いざというとき、中学生がいると助かるわね。」という声が聞かれました。

この訓練を通して、防災教育の重要性と小中連携の大切さを再認識することができました。

今、新たに「仙台市避難所運営マニュアル」の自校化に取り組んでいます。本校は、広瀬川と名取川の合流点にあります。そのため、地震だけでなく、河川のはんらんなど、あらゆるケースを想定したマニュアルにしたいと考えています。そのために、地域の皆さんの経験と知恵をお借りしています。地域と行政と学校が一体となって、いざという時のために備えたいと思っています。

震災から3年が過ぎようとしています。街は一見、以前の賑わいが戻ったように見えます。しかし、肉親を亡くされた方や家を無くした方などは、いまだに深い悲しみの中にあります。本校の教職員の中にも…。彼らは、周りの人以上に明るく勤務に励んでいます。また、保護者や児童の中にも…。

私は校長として、彼らの頑張りを認め、励まし、そして気遣いを忘れず、明るくやりがいのある職場づくりに努めています。同時に、児童にとってやればできると実感できる楽しい学校、そして地域から信頼される学校づくりを行っていく覚悟です。

編集後記

本年度も残すところわずかとなりました。この度は、会員の皆様の御協力により、「廣瀬川」第84号を刊行することができました。本号では、「復興に向けた取組を通し、たくましく生きる子どもを育てる学校経営」をテーマに、地域連携を踏まえた学校経営の推進や新たな防災教育の展開を特集するとともに、会員一同がおもてなしの心で取り組んだ第67回指定都市小学校長会研究協議会仙台大会の概要についても掲載いたしました。また、「新任校長所感」では、新任の校長先生方から、震災から学び、復興に取り組む熱い思いや決意を寄せていただきました。

御多用の中、玉稿を賜りました皆様に、心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

なお、数か所に「東日本大震災から2年8か月」等の記述がありますが、原稿を執筆していただいた時点での年月であることを申し添えます。

（第84号チーフ 三嶋 記）

編集担当者：丹治 重廣（将監小） 三嶋 廣志（宮城野小） 渡部 定男（古城小）
葛西 雄二（川平小） 石野 勝美（長町小）